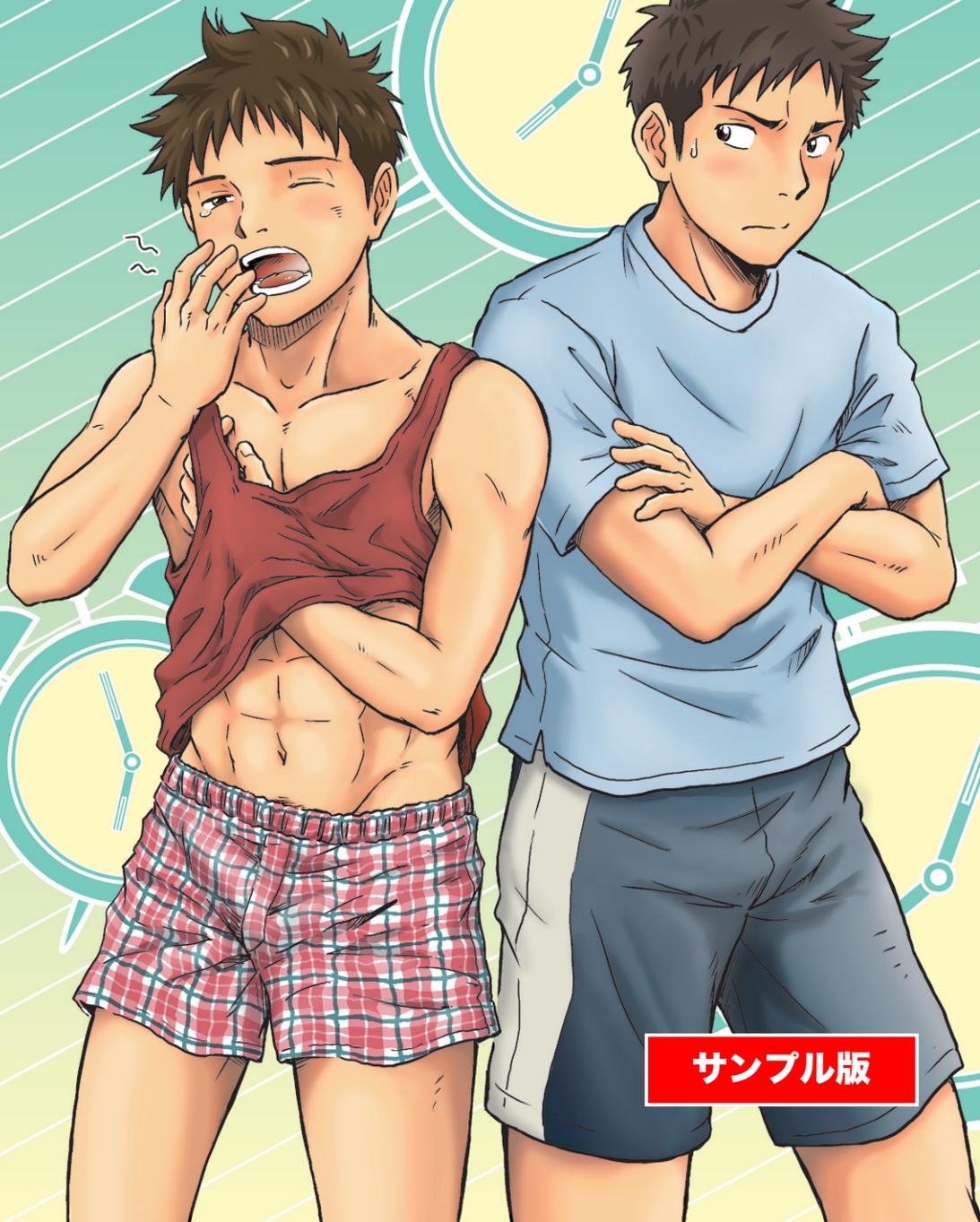


寝坊すけ先輩と 後輩めざまし君

R-18



サンプル版

サンプルをダウンロード頂き、ありがとうございます。

当作品は PDF での提供となっております。
事前にこちらのサンプルが正しく表示できるか
ご確認をお願いします。

◆PDF リーダーについて

PDF をご覧になる際は、OS やブラウザ組み込みの PDF リーダーではなく、Adobe 社純正の単体 **Acrobat Reader** をお使いいただく事をお勧めします。純正リーダー以外をご利用の場合、表示品質が低下したり、見開き表示の左右が逆になってしまう場合がございます。

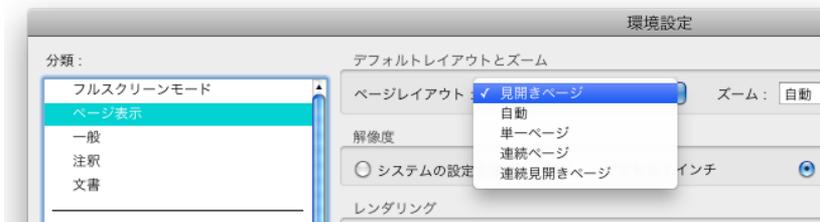
※Acrobat は何度か製品名の変更がありますが、旧製品 :Acrobat Reader (Ver.5 以降) / Adobe Reader (全 Ver.) / 最新の Acrobat Reader DC いずれでもご利用いただけます。

Acrobat Reader は下記より無料ダウンロードが可能です。

<https://get.adobe.com/jp/reader/otherversions/>

◆Acrobat の見開き表示設定について

Acrobat Reader で見開き表示する場合は次のように設定して下さい。



上記の②のかわりに、環境設定→ページ表示からページレイアウトを「見開きページ」または「連続見開きページ」を選択することもできます (デフォルト設定が見開き表示になります)

寝坊すけ先輩と後輩めざまし君

第一章

その騒音は15分待つても鳴り止むことはなかった。

仕方なく自室を出ると、向かいの部屋のドアを開けて中へ入る。部屋の中はけたたましい阿鼻叫喚の嵐だ。俺はわめき続ける奴らの息の根を片っ端から止めてゆく。窓際にずらりと並んだ連中を緘黙させ、次に床を転がり回る厄介者たちをとっ捕まえては、容赦なくその命脈を絶つ。最後に高い壁からこちらを見下ろすラスボスを光線銃で撃ち殺すと、ようやく辺りに静寂が戻ってきた。そしてこの騒動にもまったく目を覚ますことなく、悠然と寢息を立てている部屋の主の肩を揺ると、耳元でこう怒鳴った。

「ホースケ先輩、朝です起きて下さい!!」

俺の名は沖田一起、今年の春に大学を卒業して社会人の一年目だ。そして目の前で眠り続けるこの男は寢屋川抱輔、同じ職場に勤める二つ上の先輩である。ここはうちの会社の独身寮で、俺を含めて20人余りの若手男性社員が共同生活を送っていた。

会社での寢屋川先輩は仕事もバリバリこなし、明るく面倒見も良い人柄で皆に慕われている。童顔で小柄な事もあって、事務のおばちゃんたちからは「ホーちゃん、ホーちゃん」と可愛がられており、そのせいで後輩である俺までもが「ホースケ先輩」と呼ぶ。

仕事上では非の打ちどころの無いホースケ先輩ではあったが、彼には一つ重大な欠点があった。もうお気付きかと思うが、先輩は朝が弱かった。十数台の目覚ましをセットしていても、そのアラームの嵐の中でぐっすり眠り続けられる特技の持ち主だ。

そしてこの寮に入寮した次の日から、彼を叩き起こすのが俺の任務となった。配属先が同じで部屋が向かいという格好の条件を満たす俺にお鉢が回ってきたのは、まあ至極当然の成り行きではあった。

「先輩また遅刻しますよ、起きて下さいっ!」

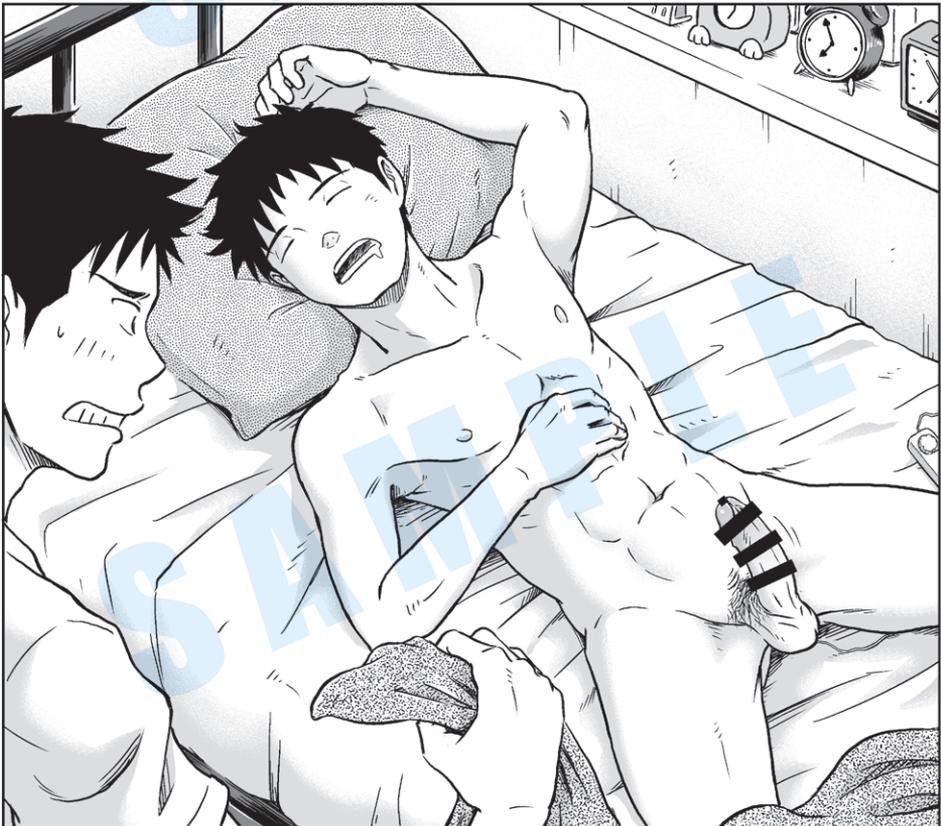
強く身体を揺さぶってみても、彼はムニヤムニヤ言うだけでまったく目覚める気配が無い。止む無く強硬手段に出る事にする。奴の包まる巣材の端をグイと掴むと、

力一杯引いて布団をむしり取った。

「うっ……」

俺は思わず唸ってしまった。何故ならホースケ先輩は素っ裸だったからだ。どうやら彼は裸族の傾向があるようで、週に一度はこうして全裸になっている。一応Tシャツとパンツを身に着けて就寝はするものの、寝ている最中に全部脱いでしまうらしい。ホースケ先輩の股間で、元気良くおっ勃った“アサダチンポ”がピクピクと揺れていた。

まあなー、こればかりは男の生理現象だから仕方ない。共同風呂で先輩の裸は散々見ていたし、こんなのは日常茶飯事だったから、もうすっかり慣れっこだ。男ばかりの单身寮では他の連中もその辺は割と大らかなのだが、それでも一応先輩の名誉のため、優しい俺はこっそり毎回パンツを穿かせてから彼を起こすよう



にしている。この日も仕方なく、行方不明のパンツを探してベッドの周囲を探索する次第となった。

その最中、俺はふと先輩の股の間から電気コードのよ
うなものが這い出しているのに気がついた。コードの
先にはダイヤル式のコントロールらしき物が付いてい
る。えっ、これつてもしや……アレじゃねえのか？

「んん……」

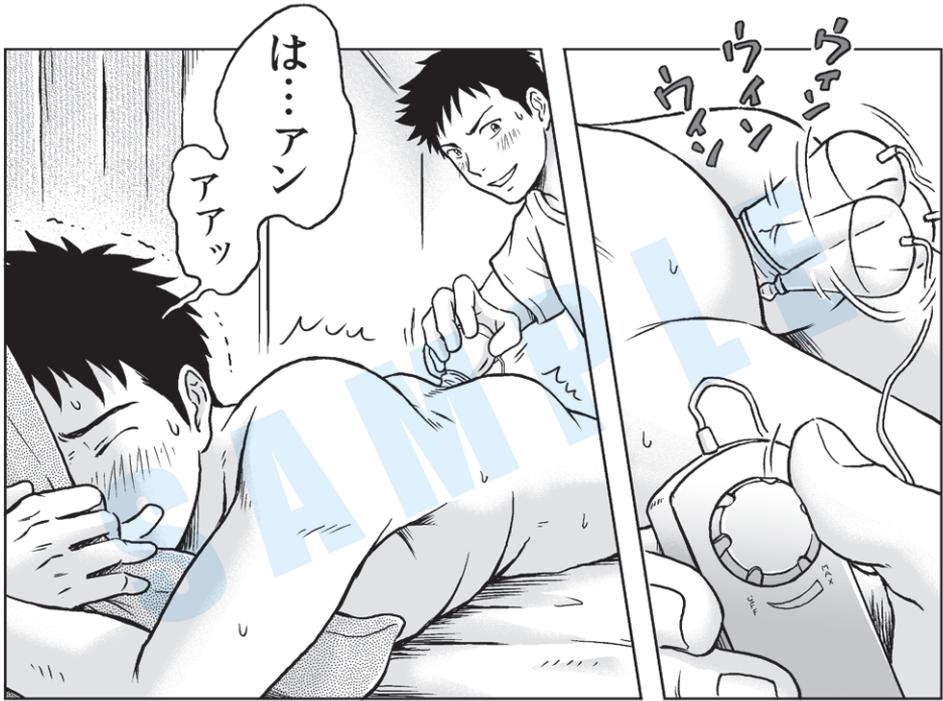
布団を剥がれ、肌寒くなったらしい先輩が寝返りを
打って丸まった。こちらに向けられた尻の穴に、シリコ
ン素材っぽい半透明の物体が嵌り込んでいる。いわゆる
大人のオモチャ……ローターとか電動ディルドとか、多
分そんな感じのやつだ。俺は思いがけず先輩の秘められ
た性癖を知ってしまった、少し動揺した。この状況、一体
どうすりゃいいんだ？

ふと傍にあったゴミ箱の中身が目に残る。昨夜生産
されたらしい新鮮なザーメン・ティッシュが投げ込まれ
てあった。おそらく寝る前にオナニー……いや、アナニー
で慰めた後、そのまま眠り込んでしまったのだろう。

俺は思案した。このまま先輩を起こさない訳にもいか
ないし、かと言ってこの状況を上手く隠蔽してやるのも
不可能だ。さすがに尻に突っ込まれたブツを引っこ抜く
勇氣は無い……そして最早どうにもならないのならば、
いつその事ちよつと悪戯して楽しんでやろうという気にな
った。毎朝厄介なモーニングコールをしてやつてるん
だから、その位の役得はあつてもいいだろう？

俺はドキドキしながらリモコン・スイッチのダイヤル
をオンにしてみた。"ウインウインウイン……"とい
う大きめのモーター音と共に、オモチャの根元部分が芋
虫のようにくねくねと動き始める。「ん……っ」という
呻き声と共に先輩の顔が歪み、意識下では尻の異変を感
じ取っているらしい。

ダイヤルのポリウムをゆつくり回し、最大にまで上
げると、ホースケ先輩の様子は明らかに変化を見せた。
「は……アン……ンッ」と色っぽいエロ声をあげながら、
明らかに快感を得ているようだ。尻のオモチャはグイ
ングインと弧を描いて暴れており、内部は掻き回されて
さぞや大変なことになっているらしいのがわかる。先輩



はうつ伏せになって枕を胸に抱きしめると、腰を振って
シーツにチンポをこすり付け始めた。俗にいう、床オナッ
てやつだ。

先輩の腰の動きは徐々に激しさを増し、シーツにチン
ポを突き立ててファックし始めるまでになった。肌が汗
ばみ、呼吸も早くなつてゆく。このままだとじきに達し
てしまいそうな勢いだ。というか、ここに至つてもまだ
目覚めないのがすごい。

俺はこの辺で止めておくべきか若干の躊躇を覚えた
が、やはり事の結末を見届けたいという好奇心の方が
勝ってしまった。オモチャの根元を掴んで固定してやる
と、支点を得た事で内と外へ分散していたクネクネ運動
のパワーが全て彼の直腸へと伝わる事態となった。

「ア……アア……アアッ」

先輩から明らかなヨがり声があがる。枕をきつく抱き
しめ、身体をのけぞらせてピンと脚が伸びた。よし、最
後の一押しだ。俺はオモチャをグツと奥へ押し込んだ。

先輩の身体は「ひぐツ……!!」という呻き声と共に激
しく痙攣を始めた。肝心の部分はシーツに押し付けられ

ていて見えなかったが、夢精しているのは明らかだ。射精のポンピングに合わせて尻えくぼが弛緩し、括約筋がキュウキュウ締め上げられているのが、支えていたオモチャ越しに伝わってくる。

結構長めの射精運動が終わると、ホースケ先輩の身体から力が抜けてぐったりとなった。そして脛がゆっくりと開くと、寝ぼけ眼の先輩は身体を浮かせてぼんやりとその部分を確認する。そこは当然、精液でべっとりだ。シートと腹筋、まだガチガチのチンポの間に幾筋ものデロデロが尾を引いていた。

それを見た彼は「やべつ」と小さく呟くと、次にアナールで暴れ続けている存在に気付いて慌てて尻に手を延ばす。そしてその拍子にベッド脇に佇む俺と視線がかち合い、「おわっ!!」という悲鳴と共に飛び上がった。

「おまつ、おまつ、ここで何してんだよっ」

尻と股間を必死で隠しながら慌ててリモコンのスイッチを切ろうとわたわたしていたが、焦って何度も取り落とす狼狽振りだ。俺は努めて冷静に、そっけない風を装っ

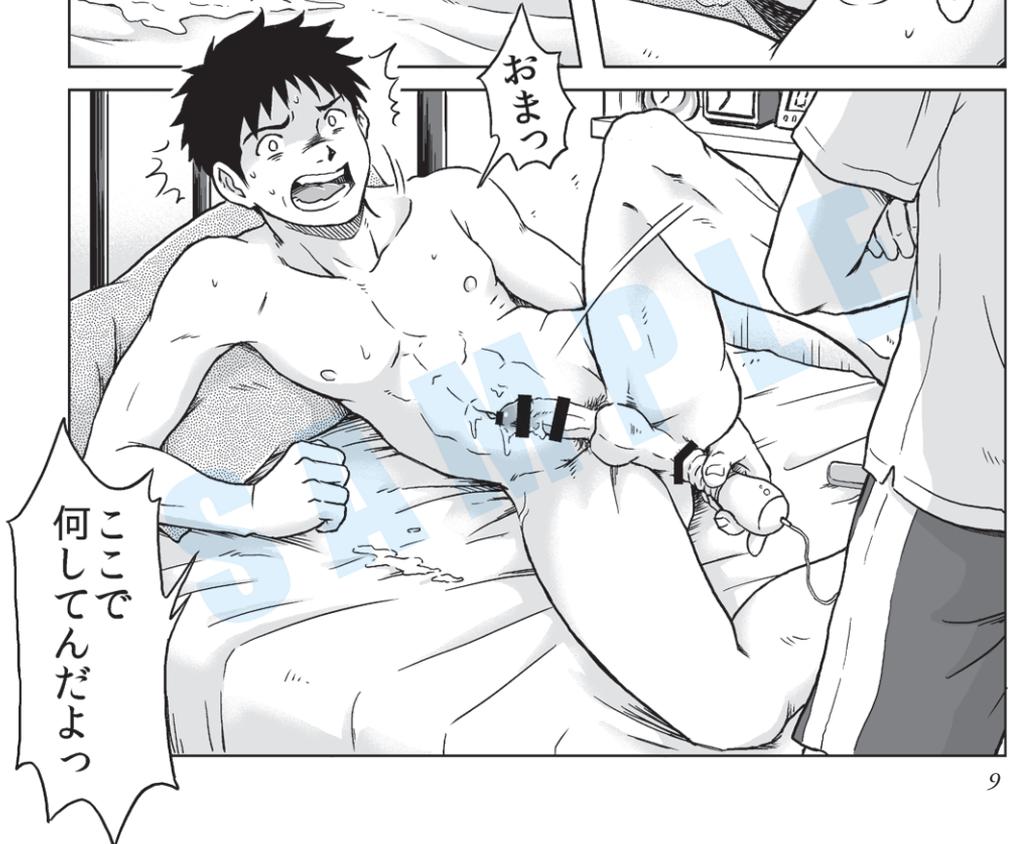
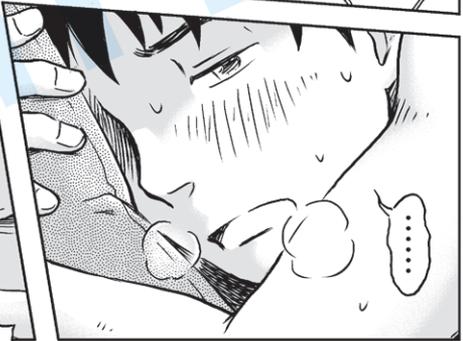
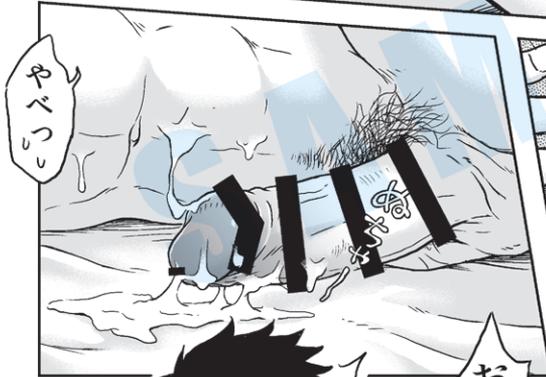
て言った。

「もう朝なんで起きて下さい。布団めくったらなんか染しそうな事になってたんでスイッチ入れてみたんですけど……あ、シート洗うなら早くしないとマジで遅刻しますよ」

先輩は血の気の退いた顔で金魚みたいにバクバクと口を開いたが、何の言葉も出ては来なかった。そりゃそうだろう。もし逆の立場だったら、この状況で何を言えいいのか俺だつてわからない。肩を小刻みに震わせながら俯く先輩をちよつと可哀そうに思いながら、俺はそのまま部屋を出て自室に戻った。



案の定、先輩は一時間遅刻して入社してくる羽目になった。同僚たちが「あれ、どうしたの？ 最近はずっと無遅刻だったのに」と声をかけたが、ホースケ先輩は「いやあ……ちよつと」と真つ赤になりながら誤魔化していた。そして俺の方は一切見ずに自分のデスクに着くと、元氣無い様子で仕事に取り掛かる。結局、午前中



の間はそのまま特に言葉を交わすことも無く過ぎていった。

昼休みになり、社食へ向かおうと席を立つた所で先輩が決まり悪そうにやって来た。

「……お、沖田、良かったら外へ食いに行かないか？」

オレが奢るからさ」

「はあ、いいんですか？」そう答えると、先輩は重い足取りで俺の前を歩き、会社の外へと連れ出した。

連れられて来たのは、そこそこ高級な焼き肉店だった。半個室の席に案内されると、先輩が店員にオーダーを入れる。お得なランチメニューではなく、和牛特選上カルビとかそういうお高い系の奴だ。俺が減多に食えない高級肉を炭火に並べていると、先輩が急に畏まって頭を下げる。

「けっ、今朝は変なものを見せて悪かったっ！」

正直、俺の方も少々申し訳ない気持ちになっていた。今朝のハプニングは、先輩のキャラならもつと悪ぶさげのなノリで済むかと思っていたので、こんなに落ち込まれるとは思っていなかったからだ。

「いや、別にいいですよ。誰にも言ったりしませんし、それにこういうの、今回が初めてって訳でも無いんですけど……」

「えっ」先輩の顔がさらに青ざめる。

「あ、いや、今朝ほどじゃ無いですけどね。ホースケ先輩、寝てる時に脱ぎ癖があつて、よく全裸になつてるんですよ……いつも俺が起こす前にパンツ穿かせてたんですけどね」

「ま、マジで？」

「ええまあ。あと先輩、毎晩寝る前にシコツてるでしょ？で、結構その痕跡が残つてるんすよね……先つちよにティッシュがくつついてたりとか」

「……………」

ホースケ先輩は体育座りの姿勢ですんごく小さくなつてしまつた。自分の両膝の間に「はあっ」とため息をつくと、「スマン」と小さく再度謝つた。

「なんかさ、出すとすっげー眠くなつちまうんだよね……それで昨日はそのまま寝落ちつちやつたみたいで、

本当にゴメンな……」ボソボソと弁解する。

「ハハ、わかります。アレ、何で眠くなるんでしょうね〜?」

俺はなるべく明るい声で、先輩を慰めるように同意してあげた。

「や、やっぱみんなそうなんだ。余韻に浸ってる内にいつの間にか眠っててさ……あーもうやばいよなー」

先輩は俺の態度にようやくほっとしたらしく、照れ笑いを浮かべながら頭を掻いた。俺も一緒にお愛想笑いを浮かべると、話題を変えるべく、丁度食べ頃に焼けた特上カルビに箸をつける。

「あ、この肉マジで美味いっすよ！ ほら先輩も食わないと焦げちゃいますって」

「お、おう」

どうにか元気を取り戻したホースケ先輩が肉を口に運び、「うん、美味しいな」と舌鼓を打った。肉を茶碗に取り、そのまま大量の白メシと一緒にがつつり頬張る。その様子がまるで食べ盛りの高校生みたくだったので、微笑ましさについて口を滑らせてしまった。

「でもさすがに今朝は驚きましたよー。尻にあんなもん突っ込んで、まさか先輩もゲイだったとは意外っす」

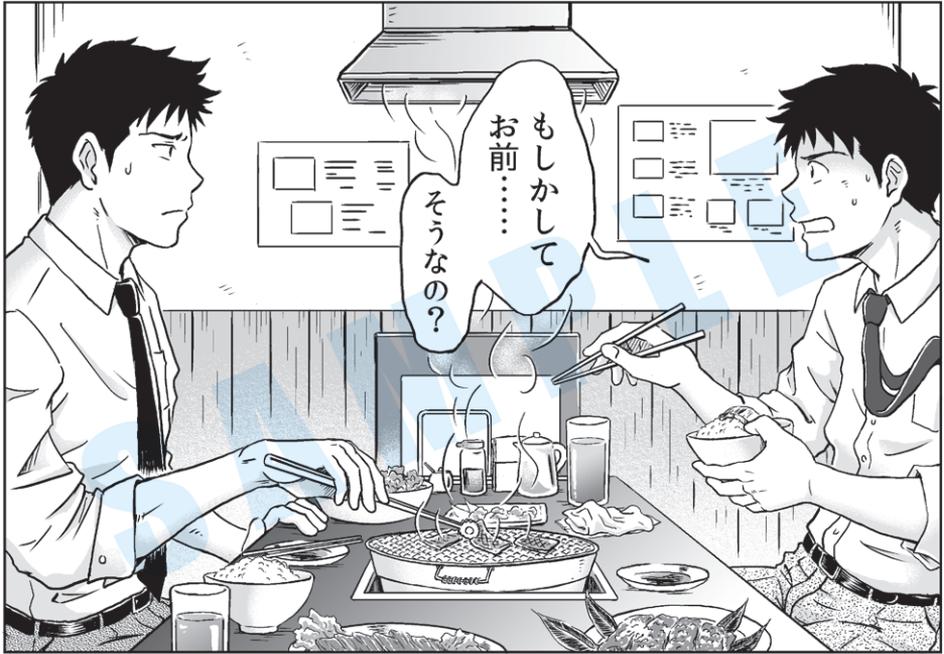
先輩が大仰にむせ返り、飯粒が飛んできた。

「お、オレはホモじゃねーよ!!」

先輩の大きな声に、向かいの席の客や通路にいた店員がこちらを振り返る。先輩は慌てて小声になると、「誤解だつて！ ケツに突っ込むからつてゲイとは限らねーだろ」と早口でまくし立てた。そしてハッと何かに気付くと硬直して俺を見る。

「え……もしかしてお前……そっなの?」

俺はしくじったと後悔した。別に先輩とどうこう成りたかった訳では無い（職場恋愛とか面倒だし）のだが、普段の生活の中で初めて同類に出会えた事で浮かれているらしい。確かに先輩の言う通り、アナルで感じるIIゲイツって訳じゃない。こっちの世界に染まり過ぎていたせいで、ノンケのアナルプレイ愛好者もたくさんいるという事実をすっかり失念していたのだ。



“あーあ、やっちゃまったなあ。俺はちよつとげんなりしたが、でもそれほど深刻に落ち込んだ訳でもなかった。親や郷里の親友にはカムアウト済みだったし、自分はそのままで秘密主義者では無い。好奇や偏見の目に晒されるのは嬉しくないが、そういう連中はこちらの方からお断りだし、その事で友人だと思っていた奴らが離れていくならそれはそれで仕方ないと割り切っていた。

ただ今回は職場の同僚という事で、出来ればゲイバレは避けたかったのだが……まあ先輩は周囲に言いふらすような人種とは違うだろう。それにこっちも彼の秘密を握っているからな、これでお互いイーブンってな訳で、大きな問題は無いと考えた。

「そうっすね……女の子もダメって訳じゃないんですけど、どっちかって言うと対象はそっち寄りですかね」

俺はちよつとぴり保険をかけてカムアウトした。セクシャリテイがまだ固まっていなかった高校時代には女子とも付き合っていて、男女のセックスも経験済みだからまるつきり嘘という訳でもない。まあ今はもう男にしか興味が無くなっているのだが、一応バイセクシャルって

事にしておいた方が受け入れて貰いやすいんじゃないか、なんて……これってちょっとズルいかな。

先輩は俺の告白を聞くとびっくりした顔になり、その後「うーん」としばし考え込み、最後にハッとなって慌てたように弁解した。

「あ、いやつ、大丈夫！ ゴメン少し驚いただけで、うんっ！……秘密は守るし、オレはそんなに偏見とかも無いからっ!!」

「あーはい、これでお互いの秘密を握った事になりますね」

俺がそう笑ってみせると、先輩も引きつり笑いを浮かべながら「そ、そうだな。アナルプレイ好き同士って事で、ハハっ」とおどけてみせた。

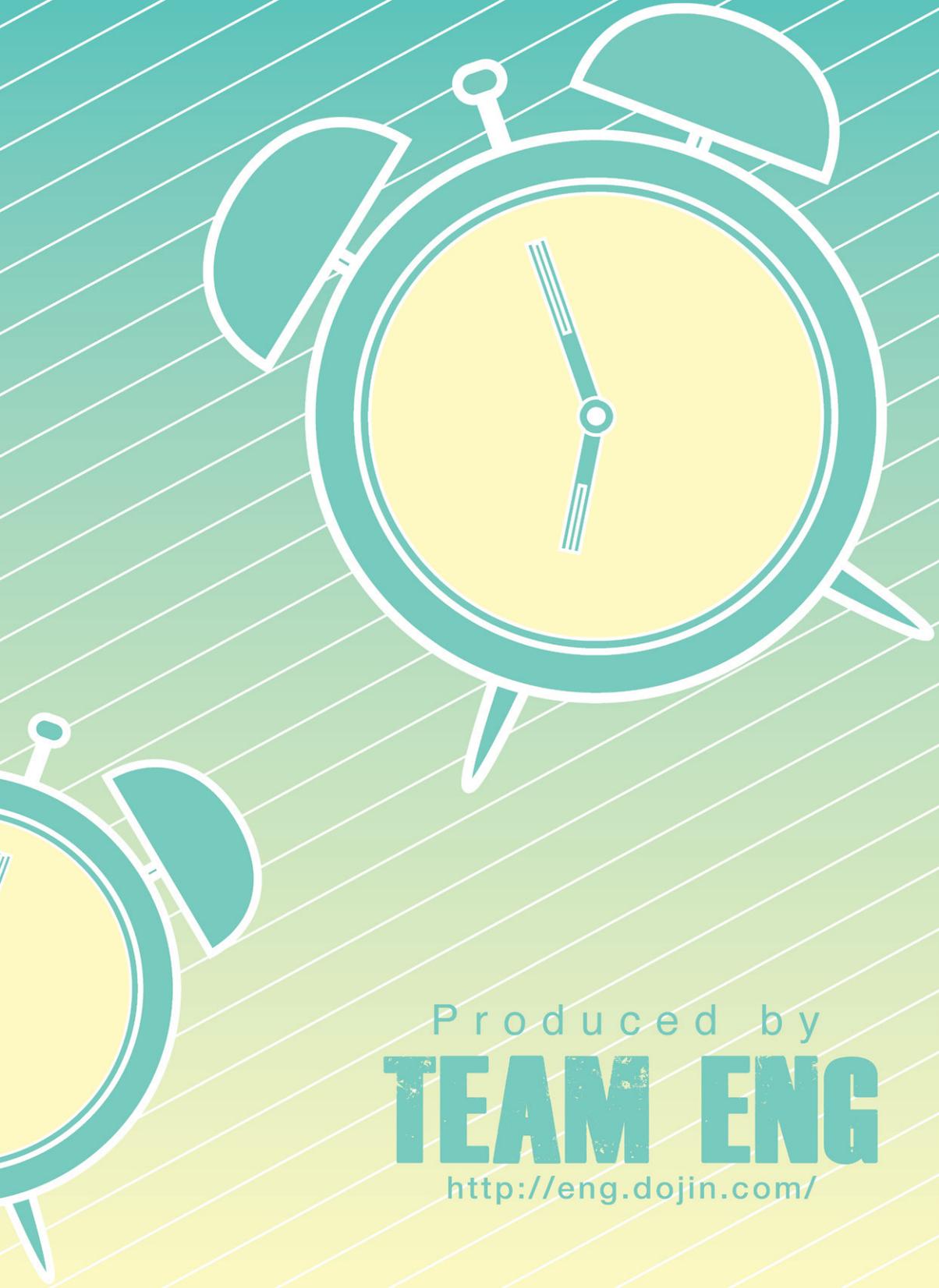
いやいや、先輩はちよつと考え違いをしている。俺はゲイだけどバリタチであつて、ケツは一切感じないんだが……まあ訂正するのも面倒だからこのままでいっつか。

「あ、やばい。あと15分で昼休憩終わりますよ！ 折角のいい肉なんだから残したら勿体ない」

俺が時計を見てそう言うと、先輩も「ホントだ、ほら沖田もどんどん食つて！」とせかし、自らも肉乗せご飯をかき込んだ。気まぜいという程でもなく、かと言って打ち解けた感じでもない微妙な空気の中で、向かい合つて一緒に高級肉を食つた。

まあノンケ相手にカミングアウトの直後としてはこんなもんだろう。これから互いの接し方がどうなるのかまだ未知数だったが、とりあえずこんな雰囲気の中でも肉は最高に美味かつた。

(サンプルはここまでです)



Produced by

TEAM ENG

<http://eng.dojin.com/>